

母子・学生・教員による「親子フラ教室」の 成立・展開過程

ーダンスを通じた子育て支援の試みー

The Development Process of a Hula School by Parents, Children, University
Students and Teachers: A Case of Child-care Support through Dancing Program

山 田 美 穂
下 山 真 衣

1. はじめに

2011年7月より、本学で地域の乳幼児と母親を対象とした「親子フラ教室」をスタートした。母親との対話をきっかけとして始まった本企画には、地域貢献活動と教育活動という二つの目的があった。つまり、親子がダンスを学ぶと同時にのんびりとリラックスできる場を提供する「子育て支援」であり、かつ子どもにかかわる専門職を目指す学生に体験的学習の機会を与える「実践的教育」であるという二つの側面を持っていた。

教室は現在も継続中であるが、本稿では2011年7月～9月に実施された第1クール・計5回の活動内容について報告する。加えて、子ども、母親、ボランティアスタッフとして参加した教育心理学科の学生と教員というメンバーの協働によって親子フラ教室という場が生み出され、展開していったプロセスを検討する。さらに、その親子フラ教室がそれぞれのメンバーにとってどのような意味を持つ場であったのかについて、臨床心理学的観点から考察する。

2. 親子フラ教室の概要

(1) 開始までの経緯

そもそものきっかけは、2011年5月、第1筆者の担当授業へのゲスト参加のためにAさんBさん親子が来学されたことであった。初めての来学であり、「若い学生さんばかりで圧倒される感じ」と、やや緊張した面持ちのまま、昼食を取りに学食へと向かっていった2組の親子は、学食から戻ると嬉しそうに「子ども用の椅子があって驚いた」「学生さんも職員さんも優しかった」と報告された。以前から興味を持っていたという「ふれあいタイム」(就実教育実践研究センター子育て支援事業)の話などをする中で、Aさんと第1筆者の趣味がハワイアンフラであり、インストラクター経験もあることから、親子フラ教室のアイデアが生まれた。思いがけないアイデアであったが、「育児中心の生活の中でも習い事がしたい」「子

どもにも音楽やリズム遊びに親しむ機会を与えたい」「行ける場所」が1つでもあると親も子ども嬉しい」という親子のニーズに合うだけでなく、学生が参加して子どもたちとかわることができれば実践的な学びの機会に、教員にとっても地域に貢献する機会になるというように、いくつもの可能性が見いだされ、具体的に企画する価値があると思われた。

しかし、親子を対象としたフラ教室を子育て支援活動として実践した例は見当たらず、企画にあたって参考にできる資料がなかった。そこで、Aさん・Bさん親子とボランティア学生数名に参加してもらい、30分のミニ教室を試験的に行った。その結果、1歳代前半の子どもたちは、不慣れな状況であっても、適切なおもちゃがあり、しっかりと寄り添う人がいれば、落ち着いて楽しんでおり、母親もフラレッスンに集中することが可能であるということが確かめられた。と同時に、参加する親子や学生の顔ぶれによって、子どもたちの反応や教室全体の雰囲気が大きく違ってくることも予測された。

そこで、まずは試行的に少人数のグループで教室を開催し、内容や位置づけを模索しながら進めていくこととした。日時は学生と教員の空き時間の都合により木曜3限とし、2回分の日程（7/14、7/28）だけをあらかじめ決めた。その後の予定は参加者と相談することとした。会場はT608ダンス教室を予約した。

親子の参加者は少人数の募集となるため宣伝は行わず、口コミによる紹介を依頼した。学生スタッフは6/28に教育心理学科の学生へのメールで募集した。参加希望があった4名の学生と7/7に事前ミーティングを行い、趣旨の説明と役割分担などを行った。

（2）参加メンバーとスケジュール

① 親子の参加者

表1 親子の参加者

表1に、第1回に参加を申し込んだ親子のプロフィールを示す。

全員が岡山市内在住で、子どもたちは第1子であった。母親の年齢は20代後半～30代後半であった。

母親	子ども	子ども性別	子どもの月齢 (第1回時)	母親の フラ経験
Aさん	aくん	男	1歳4か月	あり
Bさん	bちゃん	女	1歳4か月	なし
Cさん	cちゃん	女	1歳3か月	なし
Dさん	dちゃん	女	1歳2か月	なし
Eさん	eちゃん	女	1歳1か月	なし
Fさん	fくん	男	0歳7か月	あり

② 学生スタッフ

7/7の事前ミーティングに参加した4名は全員が教育心理学科の1年生であるが、ボランティアや親戚の子どもの世話など、何らかの形で乳幼児と触れ合った経験を持っていた。

学生の役割は、①会場準備と片付け、②会場への誘導、③受付、④子どもたちに危険がないよう目を配り、お母さんをサポートする、⑤一緒に踊る・遊ぶなどして楽しむ、⑥終了後に親子の感想を個別に聞く、⑦ミーティングで体験をシェアする、⑧個別に聞いた感想を終了後すみやかに記録して報告する、とした。また、必要に応じてレッスン用の小物や少額のおもちゃのような消耗品の選定と買い出しを担当した。

注意点として、「学生スタッフもお母さんをサポートし、危険がないよう目を配るが、お子さんを預かることや身の回りのお世話などはしない」ことを確認した。母親にも子どもから目を離さないよう事前をお願いをし、託児ではないことを事前に了解してもらった。

学生スタッフは事前ミーティングに参加した4名が第5回まで全回参加した。他には7／28（第2回）に4名、9／1（第3回）に1名の参加があった。

③ 教員スタッフ

第1筆者は全体の進行とフラレッスンのインストラクター役となるため、子どもたちと学生のかかわりをサポートする役割の教員スタッフとして第2筆者が第1回から参加した。

④ スケジュール

表2に、事前ミーティングの際に企画していたスケジュールと、修正を重ねていった第5回時のスケジュールを示す。図1～4に活動中の様子を示す。

表2 スケジュール

時間	当初計画していたスケジュール	修正を重ねたスケジュール（第5回）
12：30～	T608ダンス教室集合 ・会場準備：おもちゃ・マットのセッティング ・親子のお迎えと誘導 ・受付：参加者カードの記入、お名前シールを貼る、レイを渡す	E101模擬保育室集合 ・ミーティング ・会場準備：おもちゃ・マットのセッティング ・学生スタッフのダンス練習 ・親子のお迎え ※継続参加者のみのため受付は省略
13：00～	フラレッスン 1 はじまりのあいさつ 2 自己紹介&ひとこと 3 ストレッチ 4 お母さんたちのフラレッスン 5 子どもたちのフラレッスン 6 感想タイム（全体で） 7 おわりのあいさつ	フラレッスン 1 はじまりのあいさつ 2 ストレッチ &今日のテーマでひとこと 3 子どもたちのためのダンスタイム（学生スタッフによる） 4 お母さんたちのフラレッスン 5 おわりのあいさつ 6 感想タイム（お母さんと学生/個別で）
14：00	お見送り	お見送り
～14：40	片付け・反省会	片付け・ミーティング



図1 ひとことコーナー



図2 子どもたちのためのダンスタイム



図3 お母さんたちのフラレッスン



図4 全景

スケジュールの「6 感想タイム」は、全員で感想を話し合う時間を設ける予定だったが、状況的に難しかったため変更し、かわりに学生が個別に母親から感想を聞き取る時間を十分に取れるようにした。

3. 活動経過

毎回の終了後に教員・学生スタッフによる短いミーティングを行い、その日の気づきを共有し、改善できそうな課題があれば対応策を考えて次回試みる、ということを繰り返した。以下に示す活動プロセスは、そこで語られた内容を土台としている。さらに、学生スタッフが母親から聞き取った感想の記録を表3・4に示す。

【第1回：7/14】

Aさん、Bさん以外の親子は初めての来学であり、T608ダンス教室がわかりにくい場所にあることから、学生スタッフが駐車場の近くまでお迎えに行き、初回がスタートした。学生スタッフは親子と全くの初対面であり、自分から動きにくい場面もあったが、子どもたちは時々泣いたり母親の方へ戻って行ったりしながらも、時間の大半は落ち着いて遊んでおり、全体的には非常にスムーズにスケジュールが進行した。

最後に、子どもたちのためのダンス曲として、ディズニー映画「リロ&スティッチ」の主題歌「アロハ・エ・コモ・マイ」を紹介した。「次回はお姉さんたちがこの曲を踊ります」と予告をして曲を流しただけだったが、子どもたちは顔をあげたり体でリズムをとるなどして反応していた。

《第1回後ミーティング：7/21》

「アロハ・エ・コモ・マイ」を練習した後、ミーティングはまず学生スタッフが1人ずつ自由に感想や気づいたことを話し、必要に応じて教員がコメントしたり、次回以降の改善策を話し合うスタイルで行った。学生スタッフ全員が子どもたちと楽しく遊ぶことができたと話した。また、「もっと子どもたちの気を引くにはどうしたらいいのだろうか？」との疑問も示された。一か所で一つの遊びを長く続けるというよりも、動き回ること自体が楽しい年齢であることを確かめた上で、初回での子どもたちの様子から、シャボン玉やボールなどに興

味がありそうとの意見が出され、次回までに用意することとなった。

また、子どもたちがスピーカーを触りたがったり、踊っている母親の足元へ近づいていくなど注意が必要な場面もあり、物品の安全な配置や目配りについても話し合った。

【第2回：7/28】

単発で学生4人が初参加し、学生スタッフ8人、教員スタッフ2人での活動となった。初めに学生による「アロハ・エ・コモ・マイ」を初披露したところ、子どもたちはじっと見て興味を持ったようであった。学生が提案・準備したシャボン玉やボールも楽しんでいた。

終了後のミーティングでは、シャボン玉の跡が床に残ってしまうことについて、児童館スタッフの経験がある学生からも意見を聞き、ぞうきんを用意することとした。また、ボールペんに興味のある子がいて、絵を描くことに興味がありそうだと観察から、お絵かきセットを用意することとした。

当初は第3回以降のスケジュールを未定にしていたが、母親およびスタッフ全員から継続参加の希望があったため、5回を1クールとして活動を継続することとなった。

表3 母親の自己紹介と感想（第1・2回）

	自己紹介 #1（7/14）	感想 #1（7/14）	感想 #2（7/28）
	T608/初回		T608/学生のダンス（アロハ・エ・コモ・マイ）初披露
Aさん	フラを始めて5年。まずは「月の夜は」を皆さんと踊れるようになるのが楽しみ。	楽しかった。aは引っ張る玩具が好き。	すごく楽しかった。面倒みてくれて嬉しい。子どもの姿が見えて離れていられるのが幸せ。
Bさん	縁あって参加できてとても有難い。趣味という趣味がないので、フラを趣味にできたら。普段からステップがついてしまうくらい身につけて、生活の一部にしたい。	楽しかった。また来たい。	シャボン玉は普段しないので、子どもには新しくよかった。
Cさん	旅行でハワイに行って、フラダンスいいなと思いつつする機会がなかったの、今回参加できて、すごく楽しみ。	子どもを置いて、好きなことができてよかった。	以前やったことを忘れてしまっていたけど、少しやればすぐ思い出せて良かった。今回は学生のお姉さんたちも多く、さらに安心して子どもを預けることができた。
Dさん	フラダンスは初めて。最近産後で夏になってさらに体重が増えてしまったので、フラで下半身を鍛えて痩せたい。	楽しかった。子どもも若い人が好きだから楽しんでいた。	2回目だったので、更に楽しくできた。子どもも学生の人々に楽しく遊んでもらえて、よかった。
Eさん	ダイエットのために腰振ったり踊ったりとかしていた。いつも本場のフラダンスを踊ってみたいなと思っていたので、今日来てよかった。	フラダンスが難しかった。楽しかったので次回も参加したい。子どもと一緒に、自分の時間が作れてよかった。	最初のダンスが良かった。eもノリノリだった。CDを買ったから練習したい。今日、子どもの機嫌が良くなかったのは風邪なのと寝不足だと思う。
Fさん	フラを始めて7年くらい。今は育休中。手が離れたらまたフラに復帰したい。11月から仕事に復帰するので、この教室も来れなくなるけれど、それまでは来たい。	他の人に慣れることができて、保育園に入れる準備ができた。趣味が出来ないから、見てくれる人がいると助かる。	時間が経つのが早かった。それほど、充実した時間を送っていたのだと思う。

※自己紹介は教室の開始時（#1）に全体で、感想は毎回の教室終了時に個別で聞き取った。

【第3回：9／1】

9月中はT608ダンス教室が予約できなかったため、E101模擬保育室での開催となった。他学科の学生が1人参加した。

開始前のミーティングで、第1筆者より、ハワイにおけるレイは「つながり」の象徴であり、誰かにレイをかけることは歓迎や親愛のしるしであることから、「アロハ・エ・コモ・マイ」の間奏で、スタッフから母親にレイをかけて「ようこそ」という気持ちを伝えようと提案した。母親にも同様に説明した。

初めて使用した模擬保育室はおもちゃが多く、子どもたちはよく遊んでいた。学生スタッフも「子どもたちが声を出して話すようになっていた」「久しぶりでも怖がらずになついてくれていた」と、1か月以上会っていなかった子どもたちの成長や、自分たちとの関係がつながっていることを実感していた。新たに用意したお絵かきセットも子どもたちはよく遊んでいたが、机や床を汚してしまったため、次回からは新聞を敷くことにした。

母親たちも、子どもたちから安心して離れている様子で、母親たちだけで輪になって話し込んだり、メールアドレスを交換するなど、母親同士の交流が増えてきた。

学生スタッフより、「アロハ・エ・コモ・マイ」を踊ることには慣れてきたが、「黙って見られると緊張してやりにくい」との声があり、次回から母親にも踊ってもらう、もっと子どもたちの近くで踊る等の工夫をすることにした。

終了後、Bさんより、「私たち母親がすっかりフラに夢中になってきたので、最後の感想タイムの時に学生さんの訊きたいことと合わなくなっているのでは？学生さんからその日の子どもたちの様子を教えてもらったり、母親からも家での普段の様子を伝えたりするのはどうか」との提案があった。

【第4回：9／15】

E101模擬保育室への会場変更はやむを得ずの変更であったが、実際に使ってみると子どもたちが安全に遊びやすい環境であり、鏡がないこともフラレッスンの大きな支障にはならなかった。予想外の好評だったため、引き続きE101模擬保育室で活動することとなった。

この回から、「アロハ・エ・コモ・マイ」を母親にも一緒に踊ってもらうようにしたところ、子どもたちも「アロハ・エ・コモ・マイ」や母親たちが練習するフラ曲に合わせて一緒に踊る姿がよく見られるようになった。

Bさんの提案を受け、最後の「感想タイム」を、「子どもたちの様子について話す」時間にしてみると、それぞれが話す時間が長くなり、事後ミーティングでも子どもたち一人一人の話が生き生きと語られるようになった。母親が語った子どもの普段の様子と、活動時の子どもの様子を照らし合わせて子どもたちを理解し、関係を深めようとしていた。

【第5回：9／26】

第1クルールの最終回であり、保育園への入園を控えたfくんの最後の参加日であったことから、全員で記念撮影をした。子どもたちはだんだん振り付けを覚えてよく踊るようになり、全体的に動きのある回となった。終了後のミーティングでは、「aくんは気持ちちがのってくるまで時間がかかる、終わり際になってから調子が出てくるので、帰らなきゃいけないのをわかって散らかしている」「泣いてしまってもそのうちおさまるのがわかる」等、子どもたちの様子がこまやかに報告されるようになってきた。

第2クルールのスケジュールと継続参加の希望を確認して、第1クルールを終了した。

表4 母親の感想（第3～5回）

	感想 #3（9／1）	感想 #4（9／15）	感想 #5（9／26）
	E101に会場変更	E101／感想タイムの改善	E101／第1クルール最終回／フラ曲「月の夜は」完成
Aさん	久しぶりだったので余計に楽しかった。子どもも楽しそうにできてよかった。フラの方も順調でこれからが楽しみ。	楽しかった。毎回工夫をしてくれて感謝している。アロハエコマイと一緒に踊れてよかった。aくんは言葉を理解し始めている。	ここに来ると、子どもの家では見せない態度や表情が見れておもしろい。フラダンスもいい感じに進んでいて、ますます楽しくなってきた。
Bさん	いつも通り楽しかった。おもちゃがたくさんあったので子どもも楽しんでいてよかった。	子ども達が楽しそうだった。みんないい子だった。	だいふ踊れて楽しかった。
Cさん	久しぶりで振りを忘れていた。初めての場所でやってみて、おもちゃもいいし、子どもにとっていい。	cちゃんは家では小さいボールで遊んだり、掃除機をする真似をしたりする。家とは違った子どもの様子を見られたり聞いたりできて、とてもよかった。	フラの発表のとき、お手本がないのでドギマギした。cちゃんは言葉数が増えてきたが、まだ「ママ」と言ってくれないので寂しい。家ではアニメの音楽に合わせて、真似して踊るようになった。
Dさん	久しぶりだったけれどとても楽しかった。この時間は親子共々楽しく過ごさせてもらっているのも、次回も楽しみにしています。	だいふ慣れることができ、楽しく参加させてもらっている。さっき、来る前にムービーを見ながら練習してきた。子どもも家にばかりいてイライラしてたので、今日は本当に楽しそうにしていた。	フラの方はなんとかついていけるようになった。dちゃんがままごとを気に入っていたのは、家にはないからかも。
Eさん	フラダンスが4分の3踊れた。動きがついていかなかったが、今日撮った、ビデオを見てマスターしたい。今日、子どもがよく泣いていたが、面倒をみてくれたから安心してできて、よかった。	フラの環境に子どもが慣れてきて、泣くことが少なくなったため、フラに集中できて充実している。達成感があり、とても楽しくなってきた。	全部踊れるようになって達成感があった。eちゃんがもう少し親から離れて遊べるようになったらいいと思う。家ではテレビのCMや音楽に合わせて踊っていて母の影響かなあと思う。
Fさん	久しぶりにみなさんと集まれて良かった。fくんがハイハイできるようになって楽しそうだった。	いつも安心して子どもから離れられる。子どもがつかまり立ちをするようになった。	みなさんが練習してきてくれたので、みんなで踊れてよかった。最後なのが残念だけど、また機会があったら来たい。

3. 考察

ここではまず、参加した親子にとって親子フラ教室がどのような意味をもつ場となっていたのかについて、主に母親の感想に基づいて検討する。次に、学生スタッフにとってはどのような学びの場となっていたのかということについても検討する。ただし、本活動には当初

から学生への実践的教育という目的があったが、実際にどのような教育効果があったかということについての直接的な評価・検証には至っていない段階である。そこで、今回は活動経過に示された学生スタッフの言動の変化と、教員がどのように学習機会を作ろうとしていたかを照らし合わせるにより、学生スタッフにとっての学びについて検討することとする。これらをふまえて、教員スタッフも含めた場の成立・展開について、相互支援的関係性という観点から総合的に考察する。

(1) 親子にとってのフラ教室の意味

① 母子が同室にいながら別々にやりたいことに没頭する時間

親子フラ教室は、母子がお互いに姿が見える位置で、子どもは自由に遊び、母親は踊るといふ、「同室での別活動」というスタイルであった。「子どもを置いて好きなことができてよかった」(Cさん：#1)、「子どもと一緒になのに自分の時間が作れてよかった」(Eさん：#1)、「子どもの姿が見えて離れていられるのが幸せ」(Aさん：#3)という感想からは、完全に分離することも不可能ではないが、姿が見えないと不安で落ち着かない、という1歳前後の母子のありように適した形であったことがうかがえる。子どもが母の見える位置で少し離れて遊べる発達段階にあることと対をなすように、母親も「個としての自分」を楽しみながら「母子というユニット」にもすぐに戻れる時間を持てるということが、この年齢の親子にとって有意義な体験であったと考えられる。

② いつもとは違う子どもの姿の発見

子どもたちにとって、親子フラ教室に参加することは、馴染みのない場所で、初対面の人と接するという体験となった。「他の人に慣れることができて、保育園に入れる準備ができた」(Fさん：#1)というように、家庭の外で過ごす練習機会となっただけでなく、「家とは違った子どもの様子を見られたり聞いたりできてとてもよかった」(Cさん：#4)、「子どもの家では見せない態度や表情が見られておもしろい」(Aさん：#5)など、子どもたちが母親も見なかった面を発揮する場にもなっていたことがわかった。

それを可能とするために必要なのが、子どもたちに寄り添うスタッフであった。【第3回】での母親たちだけで話し込む様子や、「いつも安心して子どもから離れられる」(Fさん：#4)という感想に、スタッフとの信頼関係の深まりや子どもたちの発達によって、回数を重ねるごとに安心感を高めていったことが示されている。

③ 「踊ること」による楽しさ・充実感・達成感

ダンスが心身にさまざまな効果を及ぼし得る活動であることは古くから知られている。ダンスセラピストである平井(2006)は、「ダンスは遊び、自由になることが許される場、人と人をつなぎ、日常を新生させてくれる」と述べている。

従来の子育て支援活動においても「踊ること」は取り入れられてきたが、子どものための身体遊びの一つとして、子どもの運動発達や親子のコミュニケーションの促進を目的として行われる場合が多かった。しかし、本活動では子どもも大人も、というよりむしろまず大人である母親がダンスを楽しめるプログラムとなっており、その点が本活動の大きな特色であったと言える。

さらに、様々なダンスがある中で、ハワイアンフラが選択されたことも本活動の特徴であった。フラはほどよい運動強度と難易度と、ハワイアン音楽独特の明るくゆったりした雰囲気をもつ、比較的間口の広いダンスである。この点が、母親たちの「趣味ができれば」(Bさん：#1)、「下半身を鍛えたい」(Dさん：#1)といった気軽な参加動機と合致しやすかったと思われる。

また、「難しかった」(Eさん：#1)、「久しぶりで忘れていた」(Cさん：#3)といったように思うように踊れないことがあっても、「来る前に練習してきた」(Dさん：#3)等の意欲の持続により、毎回「楽しかった」という感想が聞かれた。第1クールの最終回である#5には全員で1曲を完成することができ、「みんなで踊れてよかった」(Fさん)、「達成感」(Eさん)、「なんとかついていけるようになった」(Dさん)と、それぞれが上達を確認することができた。最初のアイデアの段階から親子のニーズとして想定していたように、育児中心の生活の中で、このような自分自身の趣味を通した達成感を得ることによるリフレッシュ効果は小さくなかったと考えられる。

④ 大学／大学生がもつエネルギーに触れること

「開始までの経緯」に示したように、緊張しながら初めて来学したAさんとBさんをいい意味で驚かせたのは、本学の居心地の良さであった。この時の本学という場との出会いが印象のよいものでなければ、フラ教室開催の要望へとつながることはなかったかもしれない。このような居心地の良さは、幼児教育学科や初等教育学科等で展開されてきた子育て支援事業等の活動によって醸成されてきたものと推測される。実際に筆者が一緒に学内を歩いたときも、子どもたちとすれ違う学生から「かわいい!」と歓声が上がり、時には取り巻かれることもあるほどであり、母親は「こうやってキャンパス内を歩くだけで元気になる」としみじみ話していた。初対面の若い学生に子どもの存在が喜ばれ、褒められるということは、母親にとって大きな励みとなるようであった。

「子どもは若い人が好き」(Dさん：#1)という報告は、日常的にもよく聞かれるが、若い支援者や支援者を目指す大学生が持つそのような特質が注目されることは少ない。さらに、年長者である母親たちに対する支援者性について言及されることはほとんどない。しかし、本活動を通して浮かび上がってきた、大学生特有の支援者性は、大学という場における子育て支援活動の利点として活用できる可能性があるのではないだろうか。

(2) 学生スタッフにとっての学び

① 子どもたちと共にいることを味わい、楽しむ経験

心理臨床家である田中（2002）は、「セラピストが何をするか、どう対応するかということはもちろん重要なこと。しかしそれはクライアントがどう感じ、どう思ったか、ということの大前提としてのことです。ところが初心者はしばしば、相手の気持ちを置き去りにして、『自分はどう振る舞うべきだったか』にばかり気が向きがち」と述べている。このことは、心理臨床にとどまらず、対人支援全般に通じる指摘であると言えるだろう。そして、「支援をしなくては」という役割意識に捉われて相手が見えなくなってしまう落とし穴を避けるには、何かをしようとする前に、相手と共にいるということ、自分の中に動くものも含めてじっくりと味わうことをし続ける必要がある。

そこで、本活動では、子どもたちとのかかわり方についての事前指導を、安全に配慮するための最低限の注意事項にとどめた。また、毎回終了時のショートミーティングでも、まず子どもたちとかかわる中で自分がどう感じたかを見つめ、語り、体験を分かち合うことを重視した。その中で、子どもたちについての語りは、「かわいかった」「楽しかった」というシンプルでポジティブな感想をベースに、「もっと子どもたちの気を引くにはどうしたらいいのだろうか？」（第1回後ミーティング）という模索を経て、「久しぶりでも怖がらずになつてくれていた」（#3）と信頼関係の成立を実感し、「aくんは気持ちいがのってくるまで時間がかかる」と継続的なかかわりの中で子どもたちの個性をこまやかに捉えるという変化がみられた。

学外の専門機関における実習等に参加する際には、本活動のような学内におけるボランティア活動と異なり、支援技術を身につけ、求められる役割を理解し、責任を果たすことが課題となるのは言うまでもない。そしてそのような時にこそ、相手の気持ちを置き去りにしないセンスを持ち続けることができれば、外部機関での実習がより実り多い体験となるだろう。役割にしばられずに子どもたちとゆっくりとかかわる体験は、そのようなセンスを育てることにつながっていくのではないかと考える。

② かかわりながら場をつくるトレーニング

子どもたちへのかかわり方と同様に、場のセッティングに関しても、教員が先回りしないようにした。学生スタッフは、子どもたちと遊びながら得た気づきをもとに、環境の作り方を検討していった。「ボールペンに興味を持っていた子がいた」という観察からお絵かきセットを購入し（#2）、クレヨンでテーブルを汚した経験から新聞紙を敷く（#3）、というように、一つずつ環境を作っていった。

このようなやり方をしたのは、本活動の展開の予測しにくさがあっただけではなく、学生が場を作るトレーニングという意図もあった。理論や経験は横に置いてまず相手と会い、ニーズを読み取り、できることを提供し、その結果のフィードバックを手持ちの知識と照らし合

わせ、次のケアを考えていくということが、相手に寄り添う支援のために求められる姿勢である。学生自身が親子にかかわりながら課題を発見し、考え、試し、修正する余地があることで、時間はかかっても手応えのある学びとして蓄積されていくと考えられる。

③ 母親とのコミュニケーション

子どもにかかわる仕事に就いた支援者が悩む要因の一つに、保護者とのコミュニケーションがあると言われる。教師カウンセリングの実践を続ける諸富（2009）は、教師が語る様々な悩みの中でも、保護者対応の悩みが近年急増していると指摘している。しかし、支援者を養成する教育の中で、保護者とのかかわりを学べる機会は非常に少ないのが実情である。そのような中で、短時間であっても子どもにかかわったスタッフとして母親と会話をするトレーニングの機会になるよう、「感想タイム」を設定した。

また、第3回から加わった「学生スタッフがレイを母親にかける」という試みは、非言語的なチャンネルも使って気持ち（ここでは歓迎）を伝え、相手を支えるという体験をすることがねらいであった。

さらに、Bさんの提案によって、終了時の母親からの感想の聞き取りに、「その日の子どもたちの様子をお伝えし、普段の様子をお尋ねする」という要素が加わることになり、学生スタッフの中でも「その日たくさん遊んだ子のお母さんと話す」というルールが自然に生まれ、話し合う時間が長くなっていった。その変化は後日報告される感想にも現れ、母親から聞いた子どもの姿と自分が見た子どもの姿を照らし合わせることにより、子どもたちを多面的に理解する視点が育ちつつあるようであった。

（3）親子フラ教室の中に生まれた「相互支援の関係性」

① ダンスという営みがもたらす対等性

教員は、意識するしないにかかわらず、教員のペルソナをつけている（名取, 2002）が、踊るということはそのような仮面を外しやすくする行為である。鮮やかな色の花飾りやスカートを身につけるという「教員らしくない」行動や、生身の人間としての感情を味わい、身体で表現するということを通して、「親子－スタッフ」「学生－教員」という役割上の関係性とは異なる次元の対等な関係性が生まれていた。

子どもたちにダンスを教えるということについても、当初は「どのように指導をするか」が懸案事項であったが、大人たちが楽しんで踊っていると、子どもたちも自然に楽しそうに踊り出すということが発見できた。つまり、ダンスという共同行為によって、一方向的な「教える」ではなく、それぞれがリラックスしてその場に身を置き、「ともに楽しむ」という対等なあり方がもたらされやすくなっていた。

② 相互支援的関係性の発見

本活動は、その発案自体が、親子との出会いから生まれたアイデアによるものだった。活動のプロセスの中でも、第3回終了後のBさんからの提案など、母親たちの助けが多くあった。また、子どもたちが与えてくれる喜びや発見が、学生にとっての何よりの学びの体験であった。

さらに、学生がもつ支援者性は、教員の学生へのまなざしをも変える力があった。子どもたちや母親たちとのかかわりにおいて、「若いもんにはかなわない」部分があること、そして本活動そのものが学生の自発的な参加によって成り立っていることを意識しやすくなった。その結果、教員は進行を全てコントロールしようとするのではなく、むしろ参加者が生み出す流れを尊重し、誰かの何気ないつぶやきや思いがけない展開を活かすことが大切な役割であると思われた。

そのようにみていくと、親子フラ教室に参加した親子、学生、教員は、それぞれが支援者であり被支援者であるという、相互支援的な関係にあったとも言える。グッゲンビュール・クレイグ（1978）は、学校教員独特の課題として、教員が自分の心の中の大人性と子ども性の両方を生きることが求められると指摘している。つまり「ものをよく知っている大人」であると同時に、「ものをよく知らない子ども」であることによって、子どもの中の「ものをよく知っている大人」も活性化され、相互作用が促進されるという。このことは、実際の対象が子どもである場合に限らず、「支援をする人－される人」や「教える人－教えられる人」に通じる課題であろう。

本活動における「ともに踊ること」にはこの相互作用を促進するはたらきがあったと言える。そしてこの点は、ダンスを子育て支援活動や大学教育に取り入れることのメリットであると考えられる。

4. おわりに

今後の活動上および研究上の課題を挙げる。

（1）活動上の課題

① 教室の位置づけの模索

本活動は試行的な形でスタートしたため、公的な事業として位置づけられてはおらず、組織運営的にみて安定しているとは言い難い。今後、地域貢献活動および教育活動として安定した活動を継続していくためには運営のあり方を模索していく必要がある。

② 参加者の変化への対応

第1クールでは、第1回に参加した親子とスタッフが第5回まで継続して参加し、加えて数人の学生スタッフが1回ずつ参加したという形となったため、結果としてセミクローズドグループの活動となった。活動の立ち上げ期においては、少人数で固定したメンバーという

環境がもたらす凝集性がよい形で作用したと思われる。しかし、f さんの卒業などもあったように、今後は参加メンバーの変化もあり得ることであり、クローズドにしてしまうことのデメリットも考えていかなければならないだろう。ほどよい凝集性を保ちつつ開かれた場として展開していくことが次の段階の課題である。

（２）研究上の課題

① 子育て支援活動におけるダンスの効果の検証

先に考察したように、本活動におけるダンスの意義がいくつか示唆されており、この点について実証的に検証していくことが今後の研究課題の一つになると思われる。

ダンスがもつ治療的效果に着目した身体・心理的な表現療法としてダンスセラピーがある。本活動はダンスセラピーを謳った活動ではないが、目指すものとしては重なる部分が大いと考えられる。ダンスセラピーは日本でも発展しつつあるが、障がい児・者や高齢者を対象とした医療分野での実践が重視されている段階であり、子育て支援活動としての展開可能性を探ることは意義があるだろう。

② フラが踊り手に及ぼす影響の検討

他のダンスではなくフラを踊るということが、踊り手にどのような影響を及ぼすのだろうか。フラによる様々な健康増進効果については研究がなされるようになっており、抑うつ感の改善効果を実証した報告もある（原, 2008）。しかし、フラならではの効果あるいは影響という点については明らかにされていない。

「フラとはハワイであり、ハワイとはフラだ」（Hawaii is Hula and Hula is Hawaii）という言葉があるほど、ハワイの歴史や文化に深く根付いている（矢口, 2005）。本活動におけるフラレッスンでは深く追求することはしていないが、ハワイ文化の中核的概念であり「見返りを求めない愛」を意味するALOHA（Rezentes, 1996）を表現すること、裸足でしっかりと大地に立つこと（グラウンディング）、深い呼吸をすること、花や自然をモチーフとしたスカートやレイを身につけることなど、フラを学ぶ中で自然に体験される動作や習慣がある。それらが踊り手である母親の心身や子育てにどのように影響するのかという点は、本報告では掘り下げることができなかった。今後の課題としたい。

③ 学生への教育効果の検証

考察で述べたように、本活動に参加した学生スタッフに対する教育効果についての評価・検証も今後の研究課題である。長期的には支援の専門家としての育ちにどのような影響を与えうるかということを明らかにする必要があるだろう。まずは、フォーカス・グループ・インタビューなどを通して、親子フラ教室における主観的体験を聞き取る予定である。

謝辞

本活動に参加し、研究への協力および活動内容の公表を快諾してくださった親子・学生の皆さんに深く感謝いたします。MAHALO.

5. 引用文献

- Guggenbühl-Craig,A. 1978 Macht als gefahr beim helfer. Basel:Karger AG グッゲン
ビュール-クレイグ A. 樋口和彦・安溪真一（訳） 1981 心理療法の光と影―援助専
門家の〈力〉―. 創元社
- 原久美子 2008 フラダンスによる健康運動教室. ナップ
- 諸富祥彦 2009 教師の悩みとメンタルヘルス. 図書文化
- 名取琢自 2002 教員のメンタル・ヘルス. 一丸藤太郎・菅野信夫（編著） 学校教育相
談. ミネルヴァ書房
- Rezentes,W. C. Ka Lama Kukui-Hawaiian Psychology. Honolulu:‘A‘ali‘i Books
- 田中千穂子 2002 心理臨床への手びき. 東京大学出版会
- 矢口祐人 2005 ハワイとフラの歴史物語. イカロス出版